

三井のリフォーム住生活研究所 所長 西田 恭子

ご主人さまの書斎づくり

リタイア後の生活を考え、終の住処としてリフォームに踏み切る人が多い。

「今後一切何もしなくていい家にしたのです。次にやることは老人ホーム探しですから」と言われてリフォームの話を進めたこともあるが、どうも「終」ということばに抵抗を感じる。終末論・終末医療という言葉とイメージが重なるせいかもしれない。確かに人生の終わりを迎えるにあたっての心構えが問われ、それを見据えることは大事なのだが、同じことをするにももっと楽しそうに行えないものだろうか。

先日、楽しそうにご主人さまの書斎づくりをされた奥様がいた。

リタイア後のご主人さまは、朝起きるとテーブルで新聞をゆっくり広げて隅々まで読破し、次はテレビで朝のニュースを見ながらその内容に腹を立て、テレビに向かって毒づく。それが終わるときは今日は何をしようか? と試案しているようだという。

これは決して悪いことではないのだが、奥様からするとこの一連の行為が終わ

るまではリビングと食堂の中でどうも自分の居心地が悪いと思っていた。テレビに腹を立てても仕方がないのに! と思うのは余計なことだとも思うが、確かに二人の共有空間ではにこやかに過ごしたいものだ。

ある日、奥様は二階の納戸になってしまっていた四畳半ほどの洋室を、物を片付けてきれいにした。すると何を思ったのかご主人さまは自ら小ぶりの机と椅子をセットして、図書館から借りてきた本をそこで読み始めたという。どうやらご主人さまもそれなりに自分の居場所の確保を考えていたようだ。

ご主人さまが個室にこもる時間があることの快適さを痛感した奥様は、それならもっとその部屋を快適にしよう、窓もインナーサッシを取り付けて断熱性能だけでなく防音効果の高い読書向きの部屋とし、一部は出窓サッシにして日差しを楽しむこともできるようにした。また冬でも暖かい床暖房をつけ、照明もLEDに取り換えた。

当初はそんなものはいらないと言っていたご主人さ

まも、だんだん我が書斎に愛着が湧き、愛用のCDコンボをセットし本棚も整えて、さて次は趣味のものを飾るスペースがいるぞと気持ち膨らんできている。一緒にいるときを快適にするためには、一人で楽しく過ごすスペースも必要なのかもしれない。

奥様はその書斎にテレビの配線もようかなと目論んでいたが、これは慎重に考えた方がいいのではと思った。ドラマや映画を書斎で見だして食事の時間に呼んでも降りてこない等等、むかし子供に腹を立てたことの二の舞になってもいけない。また離婚寸前の夫婦が、サッカーのテレビ観戦を一緒にしているうちに夫婦の危機を乗り越えたという話もあるように、共通話題としてテレビの役割は大きいと思うのだ。

夫婦にとっての理想の終の住処とは何なのか? 定年後が楽しい暮らしとなるための知恵として、我が家のしつらえをよく見直し、前向きに変更を掛けることの効果は大きいと思う。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。日本建築家協会正会員。」